向井潤吉の愛でた季節
早春の武蔵野と遅春の東北

世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館
守安　美栄

都幾川（埼玉県東松山市葛袋）平成18年3月撮影

埼玉県東松山市葛袋一帯　平成18年3月撮影

埼玉県東松山市葛袋一帯　平成18年3月撮影

武蔵野の入口に出会う

私は武蔵野の中でも、とりわけ向井潤吉が頻繁に通った埼玉県東松山市神戸（ごうど）に、いかなる魅力があるものか知りたく、春も半ばの三月下旬にその地へ向かった。

東松山市神戸は、東武東上線東松山駅から約２kmほどの平地に在る。東松山は中世の城下町として発足し、江戸時代には脇往還の宿場町として栄えた町である。

初夏を思わせる陽気であった。上着を脇に挟み、額に汗を滲ませながら、駅から北西へ下り、秩父から流れる都幾川（ときがわ）を渡る。コンクリートで固められた高速道路の堅牢な高架をくぐり抜けたと同時に、視界が一瞬にして開け、遥かに長閑な田園が広がっていた。突然、空気が変わったことがわかった。澄んだ空気が肌を流れ、誘われるように軽やかに足がすすんだ。

やがて旧道のような狭い辻にぶつかった。その辻は、何度も鋪装された様子で、両側には雑木が生い茂り、長い月日のうちに、この辻を往来した人々の暮らしや産業が歴史を幾層も積み重ねられ、記憶されているのであろうと思った。私は、この土地が孕む時の流れに触れた気がした。

向井潤吉が訪れていた頃から２０年ほどの月日が経ち、随分と様相は変わっているであろうが、かつて徳富蘇峰が次のように著した武蔵野への賛辞を思い浮かべると、私がこの辻で感じた風土の記憶は、今もなお繋がり続けているように思えた。

「・・・併し平凡なる風景の中にも、佳趣がある。予れは何れかと言へば、人の余り顧みない平凡の風景を愛する。平凡の風景中にて、取分け面白きは野の景色だ。野の景色中にても、武蔵野の如きは、其の重なる一つであらう。

武蔵野の風光は、実に何とも名状し難い。其の淡々として、何等人を驚かす奇抜の光景無き所に於いて、真に野趣がある。・・・」

（徳富蘇峰『秋窓餘課』「平凡の風景」）

蘇峰は、深山幽谷の峻厳たる山々や豪流の滝などなくとも、ただ平坦に続く武蔵野の「平凡な風景」は、凡常であるがゆえに、風景に品格を生み出しているというのだ。

向井潤吉も、こうした飾り気のない穏やかな田園の中に潜む風趣に心奪われ，武蔵野の魅力から離れられなくなっている。

「武蔵野も随分とこまめに歩き回ったと思っていたが、ある日ふと未知の道を発見して曲がってみると、予期しないような手垢のつかない風景にぶつかる。」（向井潤吉『日本の民家』保育社　昭和５４年）